JA 0016312 FES 1978

M29 24175A/13 HITACHI METAL KK

HITK 30.07.76 *J5 3016-312

M(29-C).

30.07.76-JA-090334 (15.02.78) C22f-01/04 Heat treating aluminium alloy - contg. silicon, magnesium and iron as impurity, by soln. treating and tempering

A cast Al alloy contg. 6-8% Si, 0.2-0.4% Mg, and 0.001-0.15% Fe is soln, treated at 545-555°C and then subjected

to the usual tempering.

In an example, an Al alloy for a wheel disc, contg. 7% Si, 0.3% Mg, 0.14% Ti, and 0.13% Fe as impurity, was soln. treated at 550°C for 9 hrs. and quenched in hot water at 70° C. The quenched alloy was then tempered at 130°C for 4 hrs. to ppte. the Mg₂Si phase. The resultant Al alloy showed a tensile strength of 19.6 Kg/mm², elongation 6.1%. Brinell hardness 65 and impact value of 1.44 Kg-m/cm2. An Al alloy having the same compsn. and subjected to the usual soln. treatment (at 530°C) showed tensile strength, elongation, Brinell hardness and impact value of 18.1 Kg/ mm², 4.8%, 65 and 1.25 Kg-m/cm², respectively.

J53016312

148/702

19日本国特許庁

公開特許公報

①特許出願公開

昭53—16312

Int. Cl².C 22 F 1/04

識別記号

50日本分類 10 D 17 10 D 16 庁内整理番号 6735—42 6735—42

砂公開 昭和53年(1978)2月15日

発明の数 1 審査請求 未請求

(全 2 頁)

勢アルミニウム合金熱処理法

②特·

頁 昭51-90334

20出

願 昭51(1976)7月30日

仰発 明 者 渡辺洋

熊谷市三尻5200番地 日立金属

株式会社熊谷工場内

同

高田元裕

熊谷市三尻5200番地 日立金属

株式会社熊谷工場内

⑦発 明 者 中西寛紀

熊谷市三尻5200番地 日立金属

株式会社磁性材料研究所内

⑪出 願 人 日立金属株式会社

東京都千代田区丸の内2丁目1

番2号

個代 理 人 弁理士 薄田利幸

明 細 書

発明の名称 アルミニウム合金熱処理法 特許請求の範囲

重量百分率で、 Si 60~80%、 Mg 02~04%、 Fe 0001~015% を含有するᡋ物用アルミニウム 合金を鋳造後裕体化処理するにあたり、その部体・化処理温度を 545℃~ 555℃にすることを特徴と・するアルミニウム合金熱処理法。

発明の詳細な説明

本発明は、特に高朝性の領物用アルミニウム合 in 金の熱処理法に関するものである。

近年、自動車用アルミニウムホイールが開発され、その需要は急増している。 との製品はは、重要保安部品であるため機械的性質、特に朝性が優れているととが必要である。 そのため、材質上の改良、熱処理の工夫等が行なわれている。 本発りもその一つであり熱処理に検討を加え、従来以上の温度で溶体化処理を行なりととにより、機械的性質が改善されるととを見出したととに基づくものである。

従来より、 A 356 系 統合金(規格: 重量百分率: で Si 45~7.5%、 Mg Q2~Q4%、 Cu Q2%未満、 Fe 0.2 %未満、 Zn 0.1 %未満、 Ti 0.2 %未清、 Mn · 41%未満)の熱処理は、溶体化処理、焼戻し処 理の二段熱処理を施している。焼戻し処理は溶体が 化処理技、急冷するととにより過飽和に固裕され、 たMg2Si を競及時に時効析出させ、素地の強度を 高めるためのものである。一方、落体化処理は、・ 従来(520~540)℃×(6~12)Hrが通常である。 しかし、との条件では針状の共晶 8i は形状的に in 改善されず、フレームの細い製品形状によつては 機械的特性に問題があつた。共晶Siの形状改善 に関しては、 Na 抵加等諮詢処理が実施されてい る例もあるが、冷却速度が遅い場合は効果が薄く、 また、低圧餅造のように常時密閉された炉ではNa 添加がきわめて困難であり、 実施されている例は

本発明者等は溶体化温度と強度に関し研究を行なった結果、溶体化温度を 545 U以上にすることで大幅な強度の改善ができることを見出した。...

特開昭53—163122

第1 表は、本発明者等の研究による杏体化処理 温度と機械的性質の関係を示す結果の一例である。

館 1 芽

着体化温度(C)	引展り強さ代	● 伸び (%)	便さ(Ha)	衝擊值 ^{kg-m} /ca
510	166	2.9	65	0.83
5 5 0	181	4,8	65	1.25
550	19.6	6.1	65	144

第1図は、溶体化処理条件が530℃×9Hrの自動車用ホイール実体の顕微鏡写真、第2図は、同じく溶体化処理条件が550℃×9Hrの場合を示す。 顕微鏡写真である。

第1表ならびに第1図かよび第2図に示すよう。に、溶体化温度が上昇すると共晶 Si の粒状化が、進み、機械的性質、特に朝性が著しく改善される。 との値は、上配各温度で9Hr 溶体化処理し、70℃。 温水焼入後、130℃×4Hr 焼戻を実施した低圧鏡。 遠法によるアルミホイールのデイスク部より採取 した試験片の値であり、組成は Si 7.0%、 Mg 0.30 %、 Ti 0.14%、不純物として Fe 0.13%他 Trである。 以上述べたどとく、溶体化温度を従来の常識的・な値よりはるかに高い例えば 550 でとすれば前述・のように大幅に機械的性質が改善されることがわかる。即ち溶体化処理温度を 545 で以上にすると・共晶 Si が粒状化し、特に 朝性 (伸び、 衡撃値) が高まる。しかしながら、 555 でを 越えるとこの・温度は 融点 直下であり 生産管理上は非常に厳しいととになるので、 本発明では 等体化処理温度を 545 で ~ 555 でとした。

本発明によれば、溶体化処理温度の単なる変更 10 のみで、従来に比較して、著しく朝性の高いアル ミニウム貨物が得られる。

図面の簡単な説明

第1 図および第2 図は各々自動車用ホイール実体の顕微鏡写真である。

代理人 弁理士 存 田 利 幸

